

多文化共生社会と学校教育 ～外国につながりをもつ児童と小学校～

千葉県千葉市立高浜第一小学校 川名 正雄

I 現状と課題

1 現状認識

本校の学区は、海岸の埋め立て地にあり、人口は5千人程で、約7割が公営住宅である。近年、高齢化が進み、人口は減少傾向にある。また、地域住民は、強い地元愛と誇りをもっている反面、高齢者住民と若年者住民との世代間ギャップや、外国につながる住民との異文化を背景としたトラブルも報告されている。

2 課題分析・アプローチの視点

本校は現在、児童数161名、世帯数137世帯、7学級である。外国につながりをもつ児童が増え、49.7%を占めており、今後も増加傾向にある。つながりのある国や地域は中国、台湾、フィリピン、インドネシア、ベトナム、パキスタン、ハンガリー、スリランカ、タンザニアの9か国に及び、中でも中国につながる児童が圧倒的に多い。

II 研究の概要

1 取組の視点

(1) 教育課程編成の工夫

朝の時間帯(8:15～8:25)の活用(読書タイム・ドリルタイム・音読タイム等)を図る。

(2) 個に応じた学習指導(「日本語指導教室:なのはな教室」での支援)の推進

- ① 外国につながりをもつ児童が、学校生活及び学習に円滑に適応し、特性を活かせるような支援をする。
- ② 日本語指導教室での指導や支援、在籍学級での教科学習の支援等、複数体制での対応を図る。
- ③ 日本語指導教室での学習の様子を在籍学級担任と情報共有するための「連絡ノート」を活用する。
- ④ 年1回の日本語指導教室の懇談会を実施する。
- ⑤ 放課後学習支援教室を実施し、外国につながりをもつ児童(外国籍児童や中国帰国家族の児童)や学習不振児童の学力向上を図る。

(3) かかわり合う活動の推進

異学年交流等、協働的な学習活動の実践に努める。

② 付添い支援

問題文を簡単な日本語に直したり、具体物を示したりすることで、学習内容の理解を促すことができた。

(3) かかわり合う活動を推進しての成果

異学年縦割りグループでの「なかよし遊び」や全校遠足は、異学年の児童との触れ合いだけでなく、国や地域、文化を超え、親交を深める行事となった。

2 課題

外国につながりをもつ児童の割合が年々増加している。日本語での会話が難しい児童が10名余りいる他、日常生活に支障はなくても学習に困難をきたしている者が数多く在籍し、十分な対応が難しい状況である。今後、人的面、物的面等での更なる支援体制整備の必要がある。

(1) ダブルリミテッド児童の学力向上

幼少期に渡日した児童や日本生まれの児童の中に、母国語も日本語も中途半端で思考力が育っていない「ダブルリミテッド」と疑われる児童がいる。日本語で考え表現する力や学び方を身に付けさせるためには、どのような指導をすればよいのかを模索している。

(2) 効果的な教材と指導法の開発

児童が関心を持ち楽しみながら学習できるように、児童のレベルや興味に合った教材や活動を取り入れたいが、教材準備の時間には限界がある。

(3) その他の問題点及び課題

① 保護者とのコミュニケーション

重要な通知には中国語の対訳を付けているが、それには限界がある。「集金や参加同意書等の提出物が出ない。」「学習用具が揃わない。」「意味がわからないまま申込書を提出する。」等の問題が生じ、翻訳や通訳を依頼している指導協力員の負担が、非常に大きい。

② 宗教・文化の違い

近年、イスラムの児童が入学するようになった。食べてはいけない等の禁忌が多く、給食や宿泊学習等様々な場面で配慮が必要である。しかし、宗教や風習に関して未知のことが多く、指導に戸惑うことが多い。

III 成果と課題

1 成果

(1) 教育課程編成の工夫を通しての成果

朝のドリルタイムや読書タイムは、外国につながる児童の学力向上ばかりでなく、日本人児童にとっても基礎・基本の定着という面で成果が得られた。

(2) 個に応じた学習指導を推進しての成果

① 通級個別支援

個々の実態や特性に配慮し、児童一人一人の課題に合わせたきめ細かい支援ができるようになった。

IV 提言

1 学校近隣で開催されるオリパラヘジュニアボランティアとして参加することで、「多様性を尊重し、共生社会の実現に貢献できる人」を育て、外国につながる児童の自己有用感や自己肯定感の育成を図る。

2 子供たちのふるさと作りの一環として郷土史や地域の伝承を折々で伝えていくを通じ、地域や保護者、教職員、児童の一体感を醸成し、学区の共生社会の構築の一助とする。